震災後論

【5】

自分に重ねて考える

同時代 生きる者として

大石芳野さん

戦禍の地を何十年間も取材してきました。写真を見た人に、同じ時代、同じ太陽の下で、同じ空気を吸って生きている人たちの苦しみを共有してほしかった。ひとごとではないと言い続けてきたけれど、福島で原発事故が起きて、あらためて遠い世界のことではないことを突きつけられた思いがしています。

東日本大震災の直後から月に1、2回、今でも機会を見つけて帰還困難区域のような汚染のひどい地域に通っています。この3年間、何も変わっていません。例えば、放射線量のモニタリングでは計測場所がきれいに掃除され、線量は低く出る。でも、それが地域の本当の数値でしょうか。何が真実なのか見えない。

ふるさとは誰でも離れたくないですよね。国は、もう大丈夫と思いたい人たちの心理を利用しています。

被災地以外で暮らす多くの人にとって、震災や原発事故は過ぎ去ったことになっています。脱原発に消極的だと思える東京都知事が誕生し、東京電力福島第1原発から出る汚染水が「コントロールされている」と言う首相の支持率が高い。けれど、高濃度の汚染水は流出し続けています。

首相が強調する経済成長とは誰のためのものか。一部の人たちのためと言っても過言ではなく、格差は広がっている。

福島はどうでしょう。人々が忘れていけば、置き去りにされてしまう。昨年、震災以降の福島を撮影した「福島FUKUSHIMA　土と生きる」を出版しました。ここに写る「名もなき人たち」に自分を重ねてほしい、感じてほしい、考えてほしい。

モノクロの写真にしたのは、情報をそぎ落として、福島の人たちが抱える問題をストレートに伝えたかったからです。

福島には東北電力から電気が供給されています。私は東京電力の消費者としてこの地に関わり続けたい。これまで取材してきたカンボジア、沖縄、広島、長崎、チェルノブイリの延長線上に福島もあります。

なぜ気になるのか。そこには、取材で親しくなった人たちがいるからです。やり場のない怒りに震え、不安を抱える人たちがいます。彼らがつらくなる原因を、私が解決することはできません。でもそうならないように伝えることで、みんなの知恵を集めて良い方向に持っていくことならできるかもしれない。

原発事故で日本はターニングポイントを曲がってしまいました。そのことを直視し、障害物があるなら避ける努力をしないといけません。何もしなければ、気付いたときに、こんなはずじゃなかったとなる。そのことを私たちは震災で経験したはずです。

写真家の大石芳野さん

おおいし・よしの
43年東京都生まれ。01年、写真集「ベトナム　凜（りん）と」で土門拳賞。